剣・鏡・玉・矢の呪的性格

田中勝蔵

序

古代において剣・鏡・玉・矢が一種の巫物であり、呪具であつたことは隠れもない事実であるが、その呪能の性質については、未だ明らかにされていないようである。無論これらの問題については、優れた民俗学者・考古学者・神話学者らによつて、種々の解釈や意義付けが施されてはいるが、しかしそれらは必らずしも決定的な鉄案とは云い得ないであろう。素より管見に漏れた卓説の存在を惧れない訳ではないが、拙なくとも私按と同一の解説は恐らく見出だされない筈である。

さて、これらの呪具が神物として、或は神体として崇拝され、又床辺に奉安されていたという事実は、必然にこれらの儀器が単なる物素ではなく、神の観念との関連において考えるべきであり、又剣・鏡・玉が祖霊の魂憑る伝世の宝器として皇位の象徴と仰がれ、アメノカグ矢やハハ矢が天神の表物と信ぜられていたという所伝は、これらの神器と天皇の本質との深き関わりを示す充分なる徴証として、特に留意せられなければならない。

こうした事から私はこれら呪具に備わる呪的性格と、神や天皇の古代観念とは、密接に交渉するところがあつたのではないかを臆測し、以下の論考をものしたのであるが、畢竟これらの呪具は、疑いもなく生命源としての勢能を内含し、生成の活機を宿した霊的物素と信じられていたのである。而して古代における神なるものは大自然のもつ生成力――それは得体の知れぬデモンと考えられたのではなく、有情・非情の生成母として畏敬されたビーイングであつたことが後に明らかになるが――であり、天皇は生成母神（謂わば御歳神）の現し身的顕現に外ならなかつたという結論に導びかれるのである。

そこで私はまずこれらの聖器は、みな蛇神の物的表相であつたと

いう意外な事実を論述しなければならない。又それに魅けて蛇神なるものが古代農耕社会において主神たるの重倚を荷負い、一般民衆によつて生成の母神――具体的には日（火）の神・水の神――として敬仰畏怖されていた事実をも併せて論考しなければならなくなつた。

一、古代における蛇神

神の古訓ミワという語は古事記編纂の時代既に意味不明になり終つた言葉らしく、記自身もこの語に対し怪しげな俗解を施している。後、吉田東伍博士は水曲（みわ）説（大日本地名辞書）を、松岡静雄は神櫛（みわ）説（古語大辞典）を夫々提示したが、何れも妥当性に乏しく未だ定説らしきものを見ないという現状である。

併しミワが一にムワとなつていること、原古のwは実はv音であつた（大矢透博士説）という二つの事実から、私はミワとはンバ・ウバ（姥・嫗・乳母）の意であり、又姥ヶ嶽・嫗ヶ巓などが多く蛇形伝説と共に語られ、山神に仕うる巫女が山姥と呼ばれていた事実（仕えられる神と仕うる呪巫は観念的に融即し、両者一体と観ぜられるのが古代の常例であつた）に導びかれて、ウバとは山神即ち蛇神を指斥する古語であつたことに気付いたのである。而も嫗（うば）にハハの別訓のある又宜なる哉で古語拾遺には、「古語大蛇を羽々と謂ふ」と明記されている。かくの如く蛇形が乳母と呼ばれ、母と称せられたことは、それが生成育養の霊能をもつものと信ぜられていたからであると解すべきである。このことは蛇形と女性とを深く関連付けていた古人の観想からも充分窺い見られるところである。例えば肥前風土記杵島郡条の嬢子（はばこ）山、秋田の乙女（おばこ）子、老母を意味する姥にウバの訓、嫗（はば）に母の意があるなどは、この蛇形を意味するハハ・ウバ等の語が、女性全般の称呼であつたと推定される充分なる徴証を示しているものである。こうしたことは、生み且つ育くむ機能を遺憾なく発揮する女性と蛇形の霊能との間に同一性を見出だした結果に外ならないであろう。

かかる古信仰は無論神話においても語られて居るが、かの海神（蛇神）イザナギ・イザナミ両尊――この場合、本来一なる蛇神が両性に分化しているが――の国生み神話の如きその好例であろう。勿論この神話が大和朝廷の国家統一という政治事情を色濃く反映した人為神話と信ぜられているにしても、こうした神話は卒然発生するものではなく、その構想の基盤に、素朴な生成母としての蛇神の信仰があつたと考えるのが至当である。而してこの蛇神なるものは、実は海洋の神格化に外ならないが、恩師三品彰英博士は海の生産性

について立論され

「そもそもこの海洋は生成の源として、恰も天に対する大地母と類位的地位にあり、謂わばそれに水母的性能が観念されている。（中略）原初の大海に泳いでいる大蛇の頭上に土地が出来、そこに卵子が発見されたと云う神話が示しているように、原初の大海に最初より唯一あるものとしての大蛇は水界より分化せるもの或は水界を具象せるものと云い得べく、（中略）この意味から大蛇を水母的存在の代表と見て大過なかるべく、従つてその発展相の一として、大蛇が卵子に対して母の位置にあることをも理解するに難くなかろう[1]」

こうした信仰は勿論海洋民の間に発生したものであろうが、彼らにとつて海洋は、生命の親であり、生命の糧の供給源であることは勿論、その不生不滅の姿と不断の生動は、彼らにとつて畏敬措かざるところのものがあつたのであろう。

要するに蛇神における生成力の信仰は、この海洋の能産性と恒常性に根源をもつものと考えて支障なく、而もこの観想の拡がりの甚だ深く広かつたことを以下の論考において御了知願えれば幸である。この事実は又わが大和民族の主流が海洋民であつたという有力な徴証ともなり得るものであろう。なお右に関する詳論は拙稿「神の原始像」及び「再び神の原始像について」に於て試みたところである。[2]

二、蛇神の多面的性格

かくの如く蛇神は、自然のもつ生成力の神格化――無論宗教的には人格的大生命に相違ないが――に外ならぬが、この神は又具体的には日の神・水の神として把握されていたことは、記紀その他の古典に徴して極めて明らかである。蛇神なる三輪の大物主神は、「海を光して依り来」[3]たつた神であり、又建御名方神（諏訪明神）は蝦夷征伐出陣の砌大竜に変じて黒雲に駕し、辰巳に向つたのであるが、諏訪郡内の山河大地草木湖水皆光明に映徹したと伝[4]えられている。阿邪訶にすなどりして海塩に溺れたと語られる猿田彦は、この伝のみを以てしても海神たるの証歴然たるものがあるが、更に底度久御魂・都夫多都御魂・阿和佐久御魂という海神となつたことが記され、而も他面「天の八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中国[5]を光す」赫耀たる光明神であつたと語られている。

こうした事実は只わが蛇神において然るばかりでなく、中国の竜lun も水神であると共に太陽の象徴でもあるし、又満洲語の竜 mutori（満洲語、海 motori と恐らく同源語であろう）も百済の日神武珍

Mutor と同語であろうから、やはり竜神の一面が日の神・火光の神であることを示す一つの資料であろう。思うに、この日（火）と水は大自然の生成力の具体的内容たる二大要素と信ぜられていたものと解すべきであり、こうした日の神・水の神こそ農耕社会の主神たるに堪える神で、農本国印度の Naga にも類うべきわが蛇神の、古代史上に占める地位の枢要さは、蓋し想像以上のものがあつたであろうと思う。「神」字に蛇神を意味するミワの古訓のあるのも蓋し当然のことで、古代における神とは専ら蛇神を斥す称呼、少くともこの神が、八百萬の神々の中において主導的役割を果していたであろうことが偲ばれるのである。

然るに水稲栽培の技術は大陸半島方面よりの伝来なることが一般に確信されている以上、又これに随伴せる神や呪術が、同時に渡りきたつたものと考えることは、一応許されてよい事柄である。かく思い過ぎない迄も、彼我の間に多分の共通性のあつたことは争うを得ない事実である。こうしたとかくの思料の間においても、蛇神三諸の大物主神が海原を渡つて来た神であるという所伝、日本国の総鎮守とも云われた伊予大三島の大山積神[6]が百済の国より渡りきたつた神であるとの伝えなどは、積極的に打消さなければならない何らの理由もないのである。

而して蛇神の信仰は韓土にも遍ねく、竜王は護国の神聖として崇敬され、鬼神（蛇神）を祀る習俗も頗る敦厚であるばかりでなく、新羅の王者の如き、始祖赫居世王、その夫人閼英、第二世南解次々雄みな蛇陵に葬られるとあり、神話上の始祖閼智 Ar-ŏi or A-ŏi の名も、只に穀霊と解せられるばかりでなく、蛇霊の意でもあつた。即ち ar は蛇神の原義をもつ pur の転訛語で、核・穀物・卵子等の諸義を併合し、ŏi はわが霊と同語であるからである。この pur 及び ŏi についてはなお後述するが、免に角こうした事実から、農耕社会における蛇神の地位や、農耕国家の君長が生成神——具体的には稲穂を成熟せしめる御歳神——たる蛇神と観ぜられた著例を、這間に覚知することが出来るのである。

然るにこの蛇神のもつ勢能なるものは、大自然の生成力の神格化なるが故に、又具体的には光と水の人間生活への作用力にほかならぬため、それは水田経営に必須不可缺の糧料であると共に、又一面洪水旱魃等激甚なる惨害を齎らす死の水・死の光でもある。わが国の神に和魂と荒魂の二面が考えられたのも、畢竟這間の事態に即由するもので、古代人が神や天皇の性格にこうした両面を観じたことは余りにも当然な事柄である。天照大神の如き和魂的理想神が、範型的荒神たる素戔嗚尊を弟神にもつているといつた神話も、この観

点より合せ理会され、慈惠の君仁徳の如き聖王が君臨する一面、暴王武烈の荒虐が語られ、一身に和荒の両面を兼ね備えたアヂスキタカヒコネの神の行実や、雄略天皇のそれのような語り草も表われて来た。

さりながら道速振荒振るわざも、実は生成力の強烈なる発動に外ならぬことが、その語原の探究によつて明らかになるのである。右の道は前記閼智の智 ōi と同語、わが霊も之と同じく、而もその語原は韓語「靈」tōr の r 終声の脱落せる（韓語における r 終声の脱落はその実例に乏しくない）tō のチに訛つたものである。その抜差ならぬ証憑として私は、彼においては音に儲用されている道（音 tō）字が、わが国においてチと訓まれている実例、譬えば道速振・大富道尊・稜威之道別・住道などを挙示することが出来る。又 tor の瀕語に、今日迄日・火・村の意と解せられて来た韓語 pur があり、その略訳 pi はわが霊の語原であつた。而してこの pi なる語は、雷神・雷火（蛇神と同じ）を意味する羅・済語の比、麗言譬・非の pi と恐らく同語であろうから、pur に蛇神の意の籠つているらしいことは略確実である。事実神功九年新羅より質子としてわが国に送られたという微叱已知波珍干岐が、同摂政五年紀に「先の質微叱許智伐旱」とあり、波珍と伐が同語であるらしいことが推測されるが、伐は前記 pur の常儲字であり、又波珍は金沢博士の説かれたように「海の古語である事に論なき」[7] ところであるから、pur に海の神格化なる蛇神の意ありと断じて支障あるまいと思う。因みに波珍 pa-tor はわが済の語原であるらしい。というのは韓語の p 音はわが国に於て屢々 w 音に換置されているからである。

さて私は既に海の能産性が、海の神格化たる蛇神の勢能に移入されて、生成神となつた経緯を説いたのであるが、このことは当然 pur にも生成力ちよう原義をやどすことを示す前触れであつた。而してこの pur が生命源乃至は生成力に関わる語であることは、他の拙論[8]においてつぶさに論じたところで、命のイ・生のイ・息のイ・わが聖語イなどの語原であつたこと、又 pur が前記の如く ur に、更に a に迄略省されてわが接頭辞アとなつたこと、又 pur の略訳 pa・pi がわがハ・ヒとなり、祝のハ・ヒ、祝のハ（フリは pur ⟶ フル ⟶ フツと訛つたもの）となつたのであろうことを転訛の過程を綿密に辿つて推断を試みた。又 pur がわがフル・フツの語原であつたことについては、三品博士の完璧なき御論証があり、私も蛇足ながらこの語が、わが「殖ゆ」・「寄生木」更には「馨華」・「珍」・「蒐道」などの語原であつたことを指摘しておいた。（徳島大学社会科学紀要第二巻「再び神の原始像について」）

されば pu には生成力乃至は産霊の意の宿つていたことは極めて明瞭で、その略訳 pi が霊（むすび）の語原であつたこと、又霊の古訓にしてわが霊の語原であつた to とは類語であつたろうことなどを推按した私考は当然肯定されて然るべきであろう。しかも to は「生長と繁栄の大原理と考えられていた」[9]月をも斥す語であるが、蛇形は又「母権的社会の月神話圏に最も関係の深い動物として信ぜられていた」[10]のであつた。

ところが道速の速は、「雅言覚非に『蜂羅同訓也』(pö) とあり、又鶏林類事に『羅曰速』とある」[11]ことから、プルの訓のあることが知られるが、原田敏明教授も「神と速との間には自由に置換え出来るだけの近い関係」のあつたことを考証されている[12]ので、速は pu（蛇神・生成力）に充てられた仮借字と見ることが出来る。而してわが蛇神は古代における主神で、神の古訓が蛇神を意味するミワであつたということは、蛇神が神の観念を蔽いうる時代のあつたことを示すもの故、原田教授の神即速の論はまづ肯綮に値するものと信じてよい。所詮この速も、生成力・蛇神・神等を意味する語であつたのである。以下、振は当然 pu の訛つたフルと見て支障なく、荒振のアラは前述の如く pu の訛つた ar で、同じく生成力を意味し、之は又新羅語蛇形を意味する阿良と同語であろう。

かく論じ来たる時、道速振荒振とは、何れも蛇神・生成力に関わる語であり、そこに何等反価値的な意味が見出されないであろう。然るに荒ぶる神は正しく罪と悪とを齎らす神であつたのである。

要するにわが国の神なるものは、大自然の生成力――具体的には日（火）と水の霊威力――に対して与えられた称呼であり、その勢能は時に功勲として、時に破壊力として働きかけて来るのである。即ち大自然のもつ勢能は一つありきりであるが、人間社会に対しては和・荒のふたおもてを以て臨むのである。されば道速振荒振わざとは生成力外の勢能ではなく、それはむしろ生成力の強烈なる発動と解すべきで、それは尤も畏怖すべき力であるとともに、又頼もしき力でもあつたのである。荒神素戔嗚尊が永く民間の信仰の対象として変らぬ所以もこの一点にあるのである。こうした神の両面観こそ剣や矢が元来生成の呪具であつたにも不拘、やがては人を殺傷する「物の具」にうつり行く観念的契機であつたのではないか。これらのことについてはなお後に詳論しなければならない。

かくの如く、私はまず蛇神の古代観念を明らかにし、然る後、本論たる蛇神と剣・鏡・玉・矢との関係を考え、之等の呪具の本質究明に分け入ることとしたい。

三、蛇神と剣

嘗て高崎正秀博士は

「大刀は断なりと定義した語原説は、今日もう信用する学者もあるまい。それは戦が兇器を執つて争われる後代の観念を底辺として構図されているからである。原始社会にあつては、戦闘は一の魂争いとして呪術によつて終始した。従つて刀剣の類も、その観察の立脚点を変えて来ねばならぬ。今日民俗学の研究成果は、大刀は現――神意の出現する意――と同語であることを教えている。例えば越の立山――これは剣山と相並んで、如何にも太刀山と合理会される可能性が濃いが、端的に神山と見るべきで、しかも古代信仰にあつては、以下縷述するが如く、刀剣と竜蛇の信仰は深い交渉を持つていた。だからそれは第二義的には、又太刀山でもよかつた訳であるが、間に竜蛇の信仰を介入せしめて見る必要があつた。即ち現、太刀は又竜、辰とも同源の語であり、刀剣は専ら聖なる鎮魂の具として成長発達を遂げたと考えられるのである」[12]

と竜蛇と刀剣の同語源説を唱えられているが、この御高論は無論博士の広大な古代知識の含蓄をその背後に認めるにしても、なお多少の疑いが残らないでもあるまい。併し私は左のような論拠から、この説を支持するものである。

そこで私はこの問題の論究に先立ち、私なりのささやかな学問的立場を明らかにしなければならない。というのは、わが農耕文化は人も知る如く大陸、半島方面より移りきたつたものであるからにはこれと極めて密邇な関係をもつ原始宗教並びに原始宗教諸語の移入が当然考えられ、殊に後者に到つては、われにおいて恐らくは飜訳の能力も暇もなく、そのままこれを使用したであろうことが考えられる故、わが原始宗教関係諸語の語原の多くは、当然韓語に迄遡源しなければならないであろうということである。

そこで今、竜・太刀の同語原説に当面して説かねばならぬことは、此らの語原が朝鮮語 tärk であつたということで、この語は実は前記の pur や park（明その他の語義をもつ）などの類語であつた。而して tärk の実際上の発音は tär 或は pär で、前者の r 音の t に移つた（t・r 両音が、古代に於て相通じたことは顕著な音韻事実である）tär こそ、わがタツ・タチの語原であり、tär は又、神の類語の高・蛇形と同一視された嶽・蛇神の一表相と信ぜられた竹等の諸語のよつて生じた原語であつたのである。ところがこの tärk という語の原義が鷄であるという意外な事実については、充分説明を加えられな

ければならないであろう。この雞は宇野円空博士によれば、[18] 南方マライシアなどの稲米儀礼においては不可缺の聖鳥で、耕地の卜定・開墾の儀礼・播種・植付・病害の駆除・雨乞等の行事には雞を食し、又これを犠牲に供し、或はその血を供うるなど、屢々この種の呪儀に使用され、中には特に白雞を撰定するところなどもあり、わが古語拾遺末尾の記事と頗る相似るものがあるというのである。されば雞なるものは農耕と頗る関係深く、時に犠牲として献供されるのであるが、犠牲動物なるものは、それを嘉納する神それ自体である場合の少くないことは、神話学者や、民俗学者の遍く知るところである。そこで古語拾遺の場合、白雞を享受する神は御歳神即ち蛇神である故、雞と蛇神の間に何らかの関係があつたであろうことは疑う余地もない。わが天照大神は農耕の守護神としての蛇神（生成の母神）の面を持つ[19]神なるが故に、この雞をもつて神鳥とされているのであろう。こうした知識に導かれて三国遺事巻第一の赫居世王妃閼英夫人出誕神話に現われて来る雞竜という奇怪極まる存在態の意義を知ることが出来るのである。卓抜なる哉、雞竜とは訳し得て至妙というべきであろう。而もこの事実こそわが国語「辰、竜」の語原の、tark であつたことを如実に明示する資料というべきではなかろうか。

なお蛇神と刀剣の密邇な関係は、前記の tark と類語の pur ちよう言葉に於て明らかに表現されている。この pur の訛りフツがわが霊剣「師之御霊」のフツであつたことは、三品彰英博士がその名著「建国神話論考」中に詳さに論ぜられたところであるが pur は又別に蛇神を斥す語でもあつたことは既に論じた通りである。而して pur の転訛語 ur は卵子の意を荷負うものであるが、この卵子と同じ言葉の玉は右の師之御霊のタマと同語であり、霊の別訓ヒの語原は pur の略訳 pi であつたと思料される。

pur は又略訳されて pa・pi・pu・po（pe となる可能性も当然考えられるが、現在のところ私は之を実証する憑拠をもたない故省く）となり、之が邦語化してハ・ヒ・フ・ホとなる外、p は往々わが国において w（その古音は v）に換置されたので、wa・wi・wu・wo などとなる。剣の神尾羽張なる神名の如きは、wo・ha に pur の訛りハリの重畳して成立つた語で、謂わばフツノミタマのフツというに齊しいのである。大葉刈なる刀剣名も、ha とハリの転カリ（古代に於て h・k 両音は容易に相通じた）との合成語であろう。この大葉刈の別名神度剣のトは恐らく pur の類語 tor の r 終声の脱落せるものであろう。韓語において r 終声の脱落は決して稀ではないのである。この tor は霊・玉石・月・蛇神等の諸義を併合する語であつた。と

ころが高崎正秀博士はこの神度剣の正訓を探究され、この剣の別名大量（おほはかり）（古事記天若日子段）とあるところから、これをカムハカリと訓むべきを示唆されたことは誠に秀抜ではあるが、この御高説の成否は書記の記述例、神戸剣の戸の合理的解釈乃至合理的処理が可能なりや否やにかかつて居り、博士御自身も「書紀に神戸剣としたのは、度の誤認誤写か、或時代における真竜――（田中註、内山真竜）――流儀の合理会であつたろうか」と存疑の程を示されているので或は御再考の余地があるのではないかと思う。更に平国の霊剣雷建（たけみかづち）神なる神名もタケは蛇神を意味するtak（タク）の訛り、雷は蛇神と同体なるが故に、之又蛇神的称号と云い得よう。かくの如く、刀剣と蛇神は同語を以て表現されているのであるが、こうした事実は単に言語事象たるにとどまるものではなく、その背後に蛇神即刀剣の思想信仰の横わつていることは云うを俟たない。草薙剣が八俣大蛇の尾端より獲られたという神話は、この両者の関係を端的に示すものであるが、三品博士の建国神話論考に録載された支那関係の民譚にも、呉の張司空の剣が竜と化して水中に入つた話（琅邪代酔編）・有名な清太祖に纏わる老獺稚伝説――それは「一日夜自二竜泉一叙レ気、往視レ之一蛇入レ穴、因掘得レ剣、刻曰二天子剣一」（盧龍氏記事）という天子剣発見の由来譚であるが――或は後漢明帝が一剣を鋳し、上に竜形を作つて之を洛水中に沈めた話（古今刀剣録）などが伝えられ、蛇神と刀剣を同一視していたことの徴証はまことに豊かであり、刀剣を蛇神の一表相と信じていた数々の証拠が示されている。

然らば日（火）と水のつかさ神としての蛇神の霊性は当然に、刀剣にも具備せられていなければならない。げに三品彰英博士も云わるる如く「元来刀剣の鍛練に、火と水が、より古代的に云えば、天なる火の神と地なる水の神が重大視されて信仰されたことは日本に於ても、支那、朝鮮に於ても、変りのない事で」[14]刀剣はそもそもの鍛造に於て、火と水の融合体であつたのである。松本信広教授がその高著に収められたジャライ族の神剣伝説にも、剣と火と水の関わりを示す一節が見られる。

「神剣についての今一種の伝説はジャライ族の間に伝わるもの、それによるとPô・The（仏陀の訛り）の武勇談になつておる。メーコンの河に沿うて彼が下つてくると、全ての地上の王が集まつて、天から落ち河底に輝く神剣をとらんと争つておる。チャム人が成功して之を獲得したのをPô・Theが奪い、ジャライの国にもたらし、カンボジャ人は鞘だけ得て、自国にもち帰る。チャム人いかつてジャライを攻むるのを彼、神剣の霊力で之を撃退する。即ち神剣に黒白の水牛の犠牲を献じ、之を敵方に向けると、刀は

大火、大水を出だし全てのチャム人は焼かれ溺れてしまう」[15]

この場合、水牛は蛇神の別態とも考えられ、又後述のように、生成の剣が時に殺人剣ともなる一例である。

かくの如く刀剣は霊水と聖火によつて鋳造されたものなるが故に、原初においては確かに火（日）の神・水の神の両面が信ぜられ、蛇神（日の神・水の神）と同一視されるが、軈てこれら聖器から受ける実感は、火光（日）の神たるの一面が著しく強められ、水神の面がおのずから減殺されてくる。こうした事実は或は外来の強烈な日神信仰に影響されたためとも考えられるし、又神或は神話の分化発展という一般通則の線に沿うて、日の神と水の神が分離したためとも考えられる。かかる結果は生成力の二大要素の一を缺くことになる故、日の神としての剣は、水の神との交融が求められるのである、と解してよくはなかろうか。そしてそれは軈て、日の神と水の女神との神婚として語られたり、事実上人たる巫女が神妻として、日矛や刀剣に奉仕するということにもなつたようである。要するに日の神と水の神との交会融則は、神の霊威たる生成力の発動に必須な要件であつたのである。この意味で三品博士が「刀剣を水中に投入するのは神威の発動を求めるためである」[16]と説かれているのは正しい。

併し、刀剣は本来日の神・水の神である蛇神の物的表相であり、蛇神は又生命源或は生成力の同義語ともいうべき名称であつて見れば、この剣をもつもの、この剣を祀るものはその精気にあやかり、延命が約束され、長命が保障されたのである。元来蛇神なるものは、海洋の神格化なるが故に、わたつみの湛える常住の姿・生動止まざる若き命が映じ出されて謂わば神仙的相貌を呈するに到ると考えることは決して不自然なことではない。肥後江田船山古墳出土の「服此刀者長寿子孫云々」の銘文をもつ大刀は、福山敏男博士によれば、反正天皇の御代即ち紀元四四〇年前後のものと判定されているが、[17]こうした信仰の由来は蓋し遠い原古に遡るものであろうと思う。又三品博士は、刀剣の祭祀に特に意を効した垂仁天皇について考察され

「垂仁の御代に就いて一考するに、この御代の主なる御事蹟の一は、刀剣を神宝として異常に尊重し給うたことである。（中略）かのヤマト姫命が五十鈴川のほとりで神鏡神剣に奉祀し給うたのも、やはりこの御代からのことであり、この祭祀によつて天皇は

今汝御孫尊……寿命延長、復天下太平矣（紀）

との神託を得させ給うたのである」[18]

ことを指摘されている。倭建御子が病篤く、命旦夕に迫るの時

「をとめの　とこのべに　わがおきし　つるぎの大刀　その大刀はや」[19]

と詠み、わが身を去つて乙女の家の床辺に奉安されてある大刀を偲んだのも、大刀の活力に触れて将に絶えなんとする玉の緒を、繋ぎとめようとする人の子の慈孃であつたろう。さればこの歌謡は、縦し、御子の作でなく、民謡や里うたの類であつたにせよ、よくその所を得たものというべきである。或は古代において、危篤の病人の枕辺に大刀を飾るというような習俗があつたのではなかろうか。古墳の棺槨などに、往々大刀が副葬されているのは、強ち邪霊を祈攘する厭術たるにとどまらず、やはり原義的には再誕を促し、或は魂返す悲願が籠められていたのではなかろうかと思う。

石上の鎮魂呪儀とともに名高い部之御霊については三品博士の好論考[20]があり、フツなる名称の語原が韓語 pur であつたことが解明され、別段附加の必要もないが、聊か蛇足を加うれば pur に蛇神・生成力等の原義が併含されていたこと、又御霊のタマは次項「蛇神と玉」において論ずるように、pur の同義語、というよりはむしろ同語、従つて霊（生成力）の意味を荷負つていたことなどを附言しておきたい。

さればフツノミタマなる称呼は、謂わば普通名詞で、強ち物部氏のみのもつ霊剣に対する特称ではなかつたであろう。既に見て来たように尾羽張といい、大葉刈というもみなフツを語原とし、神度剣のトさえも、フツの類語 tor の r 終声の脱落したものであつたのである。而して tor といい pur という語は既に縷述の如く、ムスビを意味し、生成力をあらわす聖なる言葉であつたのである。ここで私はかの石上神宮所蔵の七支刀に言及しなければならない。その鏤刻の銘文は判読困難にして、今なほ諸学者を苦辛せしめているのであるが、福山・大場両博士らの御努力によつて略「全文の意味をとりうるにいたつた」[21]趣である。之も刀剣自体のもつ生成分岐の呪能の形象化に外ならず、それが縦え百済王が倭王のために造らしめたるものなるにせよ、恐らくは彼が我が趣好に投じたものに違いないのである。併し必ずしも彼が我に迎合したなどと考える必要がないかも知れない。というのは当代における彼我の思想信仰は余りにも酷似し、宛然同一文化圏たるの感を深めしめるからである。

四、蛇神と玉

既に前項において述べたように、生成神を意味する pur は一に pi に略訳され、それがわが霊の語原であつたのであるが、霊の朝鮮古語 tor は又玉石を意味する語であつたことは興味深い。何となれば、

霊は魂と共に、同じくタマの訓をもつているからである。而も霊・魂両字の別訓ムスビは生成というに同じく、更にはpurの転訛prが玉と同義の卵子を意味する語であつて見れば、私のpur・torの類語説は否定さるべき理由が毫もないのである。斯くの如く、韓語への溯源により、国語学者の間に解きがたき謎であつた次の二つの事項即ち珠衣を安利（その語原はprに相違ない）衣と読むいわれや、タマの真義が明らかになるのである。

ここで私は前述三品博士の、海と蛇神と卵子とに関する御解説を想起せざるを得ない。博士は蛇神を以て水界より分化せるものなることを示教されているが、私は更に卵子が韓語pr――蛇神・海などの義をもつprの転訛語、核・穀物等の諸義をも併含する語――と呼ばれていることから察して、この三者は本来一体であつたろうことを推按せざるを得ない。生命源たる卵子は又海の能産性と相通ずるものがあるからである。こうした海と卵子（玉）との密邇な関わりと、玉を名に負う海神――豊玉彦・豊玉姫・玉依姫等々――の多いことは決して無関係なことではない。されば私はかの海童・山祇（わが山神の本貫は恐らく海洋であろう）のツミとタマとは恐らく同源語であろうと考えている。

而してタマは玉・魂・霊に通じ、又神と同義なるべきを原田敏明教授はその高著「日本古代宗教」・「古代日本の信仰と社会」等において論ぜられている。然らばわが国の神なるものは正に魂（霊）即ち生成力そのものであり、その観念的実態は蛇神であつたとしなければならないであろう。

されば玉は、日の神・水の神なる蛇神の別異の表相とすべく、玉は又、火と水の精気の凝集体と信ぜられていたのである。池辺真榛が、「玉の真徳は、師説に、玉は水火の純粋の精気凝固まりたるものにて、能く水火の気を吸聚するものなる故に云々（中略）故に此の説に資つて考ふれば、太古より神人の身体に、玉を佩る事は、即ち水火の気を吸聚せしむる神制の妙法にて、其は身体を平安くあらしむる料の宝物なる事明瞭なり。（人も万物も悉く水火の為に活動くものなれば、其ノ二物闕乏する時は、たちまち其ノ人、其ノ物身体の活動を失ふなり。故予め闕乏の憂なからしむる為に、玉を佩て水火の気をよばしむる事なり）。（中略）孝徳天皇紀に、含玉の事見えたるも（漢土にも含玉の法あり）死人再び水火の気を得て蘇生む事を欲ひたるものにして（口は水火の門なる故に、死人には含ましむるなり。口に含ましむるより含むといふ名はあるなり）玉徳を頼むことはなほ死霊一般なりとすべし、然れば玉はもと身体を平安くらしむる護身の宝物なる故に云々」[29]と古信仰の程を伝え、考古学者の

間にも、古墳に夥しく副葬されている勾玉等は単なる服飾具とのみは考え難く、何らかの信仰から之に靈力を認め、死者の枕辺その他に備えたものであろうと説いているが、之も本来は死返玉の類であり、反魂の呪力をそれに認めたもので、矢張、玉のもつ生々化育の靈威力に対する信仰から起つた習俗だと考えざるを得ない。無論後には死者に依り来る邪鬼を攘い、又死者の上に浄福あらんことを願い籠められるようになつたものとも思われる。斯くの如く玉の信仰は、時間的に変容もし、発展もしたろうが、兎に角生成に対し逆作用として働く諸々の魔力、又それの対極としてある死・衰退等を克服するのみならず、更に積極的に寿福と栄光を齎らす力能さえもつと信ぜられるようになり、如意宝珠或は摩尼珠への信仰憧憬となつたようである。この珠は竜王の脳中に宿ると信ぜられていた故、蛇神の核髄と観念されていたことが知られるのである。

かの印度の神、金毘羅 Kumbira も魚身蛇形、尾に宝玉を蔵する神で、之又蛇神と玉との関わりを示す一例であろう。

私はここで今一度前出蛇神と卵子、更にそれの観念化された竜と玉について考えなければならない。三品博士は嘗て朝鮮の永童について論ぜられ、之が異文数多ある中に、竜童を以て最も適切なる会意訳となし、竜神なるものは常に御子を伴なう母子神ちよう普遍的形態をとること、又朝鮮仏教においては竜と玉との関係において観想されることを論述された好論文のあつたことを記憶に喚び起すのであるが、今この貴重な御論考を再読する機会に恵まれぬため、遺憾ながらその要領のみを摘記するにとどめなければならない。

斯く考え来たる時、かの曲妙艶美なるわが曲玉は、その原型が獣牙に暗示されたところあるにしても、或は蛇形を模せるもの、殊に子持曲玉に到つては、竜童の形象化に外ならぬとするのは思い過ぎであろうか。玉はそれ自身生成分岐の呪能をもつものなるが故に子をもつのであるが、如何にもそれはわが民族特有の表現衝動の生んだ趣好らしく、まことに興趣竭きざるものがあるのである。

かくも芽出度き呪具なるが故に、古代においては数多玉類が珍重され、宝蔵されていた。かのミホギの玉のホギはプル pur ——→フル——→フク——→ホク——→ホギと訛つたもので矢張生成力に関わる語であることに誤ない。右のルとク、一般的にr・kの両音は朝鮮のみならず、わが国に於ても相通じたもので、朝羽振くと打羽振る・太敷くと太知る・射くと射る・破くと破るなど何ら疑がわるるところなく併用されたことによつても、フルの転訛であることを信じてよいのである。而してホクの仮借字が寿であることを見ても、長寿延命の期待がこの語に宿つていることを容易に看取出取るのであ

る。饒速日尊の天より齎らした天璽の瑞宝十種の中にも生玉・足玉・死返玉・道反玉があり、[18] 天日槍将来の聖具の中にも、羽太玉・足高玉・鵜鹿鹿赤石玉などの名が発見される。[19] 右の生玉のイクは生命源乃至生成力を意味する pur の訛語慰礼の r 乃至 l 音の k に移つたもの、生の別訓フは pur の略訳 pu の訛つたものである。足玉のタルは pur の類語 tark の実際上の音 tar をその語原にもち、足高玉はこの tark の両の音 tar と tak を重ねて玉を形容した名称である。さればアシタカノタマと訓んだ旧訓は恐らくは誤であると断ぜざるを得ない。道反玉のチは道速振のチと同じく韓語霊を意味する tor の訛りであつたろうからこの玉は明らかに反魂の霊能をもつ呪玉とすべきであろう。羽太玉のハは pur の略訳 pa の訛り、フトはフルのルのトに訛つたものであり（r・t 両音は相通）、鵜鹿鹿のウは pur の略訳 pu の wu となつたもの、カガは後項「蛇神と鏡」において又論及するところであるが同じく蛇神を意味する語であつたのである。以上甚だ煩瑣な音韻の転訛について述べたが、その委細は拙稿「聖語 pur の研究」――朝鮮学報第六輯――について御了解願わなければならない。

次に石も又玉と同一視されたものと見え、玉石などと熟し、前記の如く天日槍将来の神宝にウカガアカイシダマなるものが挙げられている。[20] されば石も又火（日）と水の合一体であり、生む力・育くむ呪能即ち産霊の霊力の持主であるばかりでなく、更に水旱支配の勢能さえ籠る神物であつたことに留意すべきである。韓語玉石を意味する tor は同時に霊を意味し、又日の神、水の神たる蛇神 pur の類語であつたことは既に縷述の通りである。

かるが故に、石はそれ自身生長の能力をもち、「熊野や伊勢や淡路で拾つた石が大きくなつたというような伝承さえ発生して来るのである」。[21] 又柳田国男先生の石神問答は、この私見を民俗の側から立証して呉れるもので、譬えば出雲風土記楯縫郡神名備山条の石神に関する伝説などその好例であろう。この石神については古老相伝えてタギツヒコの御魂となし、雨乞の神なることを述べている。肥後和男博士も「私の村などでも石の雷神様があつて、雨乞の時は若者たちがかつぎ出し、川の中に入れてさんざんにもみ立てるのである。こうした習俗はよほど古いことであろう」[22] と報告されている。

しかし既述のように、石神は只に水神たるのみにとどまるものではなく、一面又日和を祈る対象神でもあつた。三品博士は「メラネシヤでは神聖な石はマナを持つものとして崇拝され、その神聖の印に赤土を以て塗られる場合があり、又司霊者が日和を祈る場合、立

石を赤土で塗つて太陽の出現を祈る。時に赤い紐を巻きつけた丸い石（vat boa or sunstone）が高い聖樹の枝にかけられることさえある」[26]ことを紹介されている。

石は又生成の神・産霊の神なるが故に、石女が懐妊を祈る対象となる。肥後博士は「肥前風土記の神崎郡の船帆の郷には、昔、景行天皇がこの地に船で来たときの沈石が四つ残つているとし、（中略）子のない女がこの石についてうやうやしく禱れば懐妊するといい、またもう一の石は（中略）日でりの時に雨乞をすると必ずしるしありとしている。（中略）ここに見る懐妊の力をもつという石神もその例は甚だ多いらしい。その一端は石神問答にも見えているが、これは同書に山中笑氏が示唆しているように、その石を陽石と見たてることにもとづくのであろう。同氏は石神に良縁安産を祈る例が多いとして、その理由を主としてこの陽石崇拝においているとすればそれは石が男性と考えられたことになるが、前記のヒメコソの神の例のように女性に見立てられることもあり、この例は皇太神宮延暦儀式帳に少くない」[27]というのであるが、石は山中氏の如く、特に陽石と見立てるまでもなく、石は石そのままに生成力の主体であるから、若し陰陽を問題にするならば、玉石と蛇神との関係から見て、むしろ母神的であることは極めて明らかである。それ故石神には御子神を伴なうという話があつても好い筈で、大洗磯前の二石神は廿余の侍座する如き小石神をもち、[28]出雲風土記楯縫郡神名樋山条の大石神に百余の小石神を伴なうのである。正しくそれは永童の別態でなければならない。而して石は玉なるが故に、大洗磯前の場合は火光天に宙し、又雷神様と考えられ、而も水の神としてタギツヒコノ命とも信ぜられていたのである。折口博士は「日琉に通ずる『たま』の根本義を考えると一種の火光をともなうものという義があるようである」[29]と云われているが、タマのもつ一面を道破したものとして正しい。併しタマには水神の一面のあつたことをも銘記せらるべきである。要するに玉石も又蛇神の別態として、水旱の神であり、又生成の呪能を内含した神物であつたのである。

五、蛇神と鏡

鏡については高崎正秀博士の「鏡は陽燧として発達し、もともと玉の一変型に過ぎなかつたと思われる云々」[30]という誠に示唆深い論考がある。この鏡が果して博士の推定せらるる如く玉の変型なりや否やについては、漸次論及せんとするものであるが、右の鏡鑑陽燧説は駒井和愛博士も説くところであるが、[31]矢張日神招禱の聖具として尊重されたであろうことは想像に難くない。それは日神の魂の憑

り代として神物視され、又神そのものであつたであろう。併しそれは只に日神としてあるのみではなく、水にも深く関わるものあること、玉や剣と全く同様である。

雄略紀三年夏四月紀には、葛幡皇女が寃罪を蒙むり、五十鈴の河上に神鏡を埋めて縊死したその後日譚として、闇夜河上に於て虵の如き四五丈の虹立つ辺りを掘開せるに、その神鏡が現われ出でたということが語られている。これも埋設の箇所を文字通りに水上と見ても、上をホトリの意に解しても、水と鏡との関わりを示すものであることに変りはないし、虹が大蛇の如く見えたと云うのも、鏡と蛇神との間に古人が何らかの関係を信じていたそのあらわれと見て不可ない。高崎博士はニジ（虹）をナギ（蛇）と同根語だと道破されている。[15]

八咫鏡を奉安する伊勢神宮も聖川五十鈴の川の辺りに鎮座し、その別名は磯の宮と称せられていた。又海神天日槍将来の神宝に奥津鏡・辺津鏡があり、饒速日尊も瀛都鏡・辺都鏡を他のくさぐさの宝器とともに齎らしたが、これらの鏡は恐らく海洋民の間に奉戴された神宝であつたろう。紀国造家が海人の豪族であつたことは、数々の証憑によつて明示されるところであるが、その祀るところの神は日前・国懸という二面の宝鏡であつた。該神社の社家伝記によれば「崇神天皇（入皇第十代）の御宇に至り、豊鋤入姫命天照大神の御霊を戴き奉り、五十一年四月八日本国（紀の国）名草郡浜宮（毛見郷也）に迂ります時、日前、国懸両大神は海底の岩上を離れ、名草浜に移り宮を並べ共に住み給う。」

とある。私はこの社家伝記なるものの史料価値を正当に判断することは出来ないが、尠くとも斯かる伝承の拠つて生ずる基底には、鏡と水の密邇な関係が信ぜられていたという事実が存在したとしなければならない。私は瀛都鏡というのは、沖合の海底の巌上に鎮斎された鏡の謂であろうかとも考えて見た。かく解することが正しければ、該伝記は従来奥津鏡として崇奉されていた日前・国懸両神が辺津鏡として迎えられるようになつたことを物語るものであろうか。

次の所伝も神鏡が水泳る点において相類するものがあるのではないかと思う。崇神天皇の朝に出雲の神宝が徵せられたことがあつた。しかし神宝は部族の生命の根源なる魂故に、固く惜み守られるのが常であるが、出雲臣家の飯入根が兄振根の旅行不在中に献上してしまつた。振根帰還して大いに怒り、弟を謀殺したが、振根も朝敵として誅伐を蒙むらねばならなかつた。この事件以後出雲臣家は朝廷を憚つて大神を祀らなかつたのである。然るに丹波氷上の

人氷香戸辺の子が「玉葉鎮石。出雲人祭。真種之甘美鏡。押羽振。甘美御神底宝御宝主。山河之水泳御魂。静挂。甘美御神底宝御宝主也（略）」という頗る難解な神託を伝宣するのである。この章句については宣長や篤胤の註解があるが、従い難い点が多いので、私限りの考を述べれば、祭る・羽振る・鎮め挂けるなどは何れも鎮斎にかかわる語であり、その鎮斎の対象たるものは玉葉鎮石といわれる霊石と真種の甘美鏡と称せられる神鏡であつた。この二種の神宝が未だ召し残されて出雲大神の形代となつていたものと見えるが、当時大和朝廷に既に徴されていた神宝が果して何であつたかについては又別に考えなければならない。

さて右の二宝器たる霊石と神鏡——之を総称したのが以下に見える甘美御神であり、底宝御宝主（この主は経津主のそれの如く尊称的語尾辞と見るのが至当である）で、この部分が二度迄も復唱されていることは注意を向けらるべきである。その底宝と云われ、水泳御魂と呼ばれるこれら二神宝は、或は山河の水底に鎮安されてあつたのではないかというのが私の考である。鏡ではないが水泳る霊剣の民譚、神話等のその例に乏しくないことと合せ考うべきである。前出の宝珠山如意寺の神剣が火光を発して海に入水したという話、呉の司張空の剣が竜と化して水中に入つた話、後漢の明帝が一剣を鋳造し、その上に竜形を作つて之を洛水に沈めた話などはその一端であるが、鏡も元来蛇神の物的表相なるが故に、水海に沈潜する宿命にあるのだと解してよかろう。

元来鏡は記によれば、伊斯許理度売命に科せて、作らしめたとあるが、この神名に対する紀、天石窟之変段第一の一書の傳学を見るに石凝姥とある。このトメが蛇神を意味し、ツミと同源語であつたろうことは前述の論考によつて疑を容れぬところであるから、この蛇神的称号をもつ巫覡的冶匠の精魂凝つたこの呪具こそ、まさに蛇霊の精と観じて支障ないであろう。されば鏡の中には真経津鏡と呼ばれるものもあつて、蛇神 pur との結び付きを明らかに示している場合さえある。即ち神代紀天石窟之変段に、真経津鏡は八咫鏡の別名との原註がある外、倭姫命世記にも、伊勢度会の宮に坐す大神の御霊形は真経津鏡円鏡なるを説き、播磨風土記賀古郡条も麻布都鏡の名が見えている。さればこのフツの原義から推して、鏡も当然生成の呪能を内包する聖器として信奉されていたろうことが推測されるが、なお考古学者の側から提出された二、三の証憑を次に借用提示したい。

紀元前後の弥生式遺跡として著明な筑前糸島郡怡土村井原に出土した方格規矩四神鏡系の諸鏡の銘帯には、漢長宜子孫鏡の銘文に類

する慶文嘉言が列ねられ、黍言之紀造鏡なる文言にはじまる鏡には、長宜孫子の語句が読取られ、漢草葉文大山四神鏡は判読し難い迄に欠損しているが、同種の他鏡銘との比較校合により、宜官秩保子孫、豊富昌楽未央と読まれることが報告されている。[33]

これらは同国筑紫郡春日村須玖発見精白鏡の銘文が呪教や神仙思想の盛行した南支楚国の文学楚辞の乱や賦と甚だ相似るものあるとともにわれわれの深い関心を唆るものであるが、生成の讃仰がおのずからにしてこうした思想に迄発展することは余りにも当然過ぎることである。勿論この鏡は漢土伝来のものに相違ないから、かの国における鑑鏡に対する信仰も斯くあつたことを示す一方、之を歓び迎えたわが須玖びとや怡土人の斯物に対する思慕と憧憬をも同時に示しているものと見なければならないのである。

思えばわが蛇神のもつ生成の勢能なるものは、海洋の能産性に基づくもの、自然海洋のもつ永遠にして恒常なる姿、無限の富源、はては歓楽尽きるなき竜宮的相貌が自ずから蛇神の観念に導入されたであろう。さればこそわが山神（海神の転じたるもの）の信仰等に神仙的雰囲気がまつわり、又常世の国より伝来せるこれら宝鏡が歓迎されたのであろう。

紀州隅田八幡社蔵画像鏡銘文にも

「癸未年八月日十、大王ノ年男弟王、在二意柴沙加宮一年、斯麻念二長寿一、遣下開中費直穢人、今州利二人等一取二白上同二百旱一、作二此竟一」

とあり、斯麻なるものが大王の長寿祈願のために冶匠をしてこの鏡を作らしめたことが刻銘されているのである。この全文の意味は福山敏男博士によれば、紀元五〇三年継体天皇オシサカノ宮にある時、斯麻が天皇の万歳を祈念して、河内直ヤヤ人や今州利等に命じ、白上銅二百旱を以て鏡を鋳造せしめたというのである。[34]

最後にカガミの語原考を試み、この項を了えたいと思う。そこで先に論じ残した鵜鹿鹿赤石玉のウは既に論じたように、pur の略訳 pu の wu に訛つたもので、わが大を意味するウと同語であることは勿論である。[35] 私はここで pur の訛り ur も大の意を兼ね荷負ていたことと、韓語の p が我に於て往々 w 音に換置されたという音韻的事実を附記しなければならない。而して赤は韓語 purk（事実上の発音は pur or puk）で pur と同根語且つ何れも光に関わる語であるが、この pur と purk の間に介在するカガは恐らくカガヤクのカガと断定して万誤あるまい。而して赫くの赫も又 purk であるから、カガも又蛇神 pur の同根語だといい得るであろう。羽明玉というも、ハは pur の略訳 pa のハに訛れるもの、明は purk で之又 pur, purk な

どと同根の語であるから、一応は光り輝く玉の意と解せられるが、更に立入つて考うるに、それは竜玉を意味し、生成の呪玉を意味するのである。こうした解釈はウカガアカイシダマについても云い得るところである。そこでこの際私は高崎正秀博士の「天香山命のかぐ、天香語山のかぐが天香具山、天迦久神のかぐ等と共に、一の蛇形神崇拝に起因するらしいことは、別に蟒蛇と案山子の問題の解説で、今一度取り上げねばならぬ」[36]という御高論を想起せざるを得ない。以来この御高論が如何に展開されたかは知るよしもないが、はからずも私考と合致したものと云わねばならない。併しカガが蛇神の意であるらしいことがわかつても、カガとpur或はpurkと如何に関わるかが又問題である。そこで私はわがハハ（蛇神と同語）という語は、拙稿「聖語purの研究」[37]に於て詳論したように、purの略訳paの重言papaのハハに訛つたもの、このハハがk・h両音相通の故にカカ・カガなどに訛つたのではないかと考えたいのである。母は同時に母であり、又後項において論ずる如く天羽羽矢と天之迦久矢と同一物と見ねばならぬ故、こうした考按は充分許されてよいのである。なおカガ及び蛇神即案山子に関する詳論は別の拙稿「すめら考」に譲らねばならない。

かく考え来たる時、宝鏡を神体とする日前・国懸の神なる神名は、ヒノクマの日の神なるは勿論（韓語神はkŏm固麻で、高句麗の神獣熊kŏm固麻――水の熊神はわが蛇神に齊しい――と同系語であろう）、カガシの原義も前記の蟒蛇・案山子に相通い、蛇神或は神の義と考えられてよい。カガシのシ、カガチのチは、多分霊を意味するチ及びその訛語と考えて支障なきものの如くである。

ところでカガミのカガが蛇神を尽す語であることを認めるにしても、ミとは何ぞやの問題が又残るのである。併しミは恐らくはpurの略訳pi.mi.に訛つたものとすべきで、それは霊の意味であると共に、purの訛りpiが穀物・卵子・核などの諸義を含むことから推して、矢張生命の根源としての実（種）を意味するものであろう。かくして前出玉菱鎮石の神託に、甘美鏡を形容して、真種之甘美鏡ととなえられている理由が明らかになるのである。かくの如く鏡は生成の呪具であり、生命の拠つて生ずる本源であつたが故に、それみずからに生成分岐の勢能をもち、これが形象化されて七子鏡となり、[38]鈴鏡となつたと思われる。

六、蛇神と矢

神武天皇が饒速日尊と示し合われた天つ神の表物たる天羽々矢は正

しく生成の霊矢ちよう意味をもつ宝器であつた。何となればハハとは母・姨・蛇神の謂であり、又生み成す源体の義であつて、語原的にはpurの略訳papaの重言papaのハハに訛つた名称であつたことは既に論じつくした通りである。このハハ矢に類するものとして天之加久矢（記、天若日子段）・天之麻迦古弓、天波波矢（記、天若日子段）・天之真鹿児矢（記、天孫降臨段）・天鹿児弓、天羽羽矢（紀、天稚彦段）・天鹿児弓、天真欽児矢（紀、天稚彦段第一の一書）・天梔弓、天羽羽矢（記、天孫降臨段第四の一書）があり、うちハシ弓のハシは今思い得ないが、マカゴのマは無論聖的接頭辞、カク・カコは第五項で既に論じたカガ・カグと同系語、即ち母（ほぼ）→母（ぼか）から訛つた語とすべきで、恐らく羽々矢と同語であろうことは容易に推されるであろう。或はpurの同根語parkの実際音pakからハク→カク→カコと転訛したものか何れかであろうが、何れにせよ生成の呪矢と解することに誤はない。但しカク、ハハは蛇神に関わる語なるが故に、蛇神の神性から見て火光の意味を併せもつことは勿論である。

この矢に関する伝説は、中国・朝鮮その他の諸国に語り継がれているのであるが、その真義はなお明らかでなかつたようである。併しわが国にはからずもハハ矢・カク矢などの旧語が残存して、それが生成の霊矢・生命の呪矢であることを明らかに示していることは誠に幸なことである。なお丹塗矢については、松村武雄博士が「原始人における血液と赤色とは生命力の聯想から生命活力の標徴として塗られたものである」[18]ことを説かれている。博士は更に丹塗矢の意味を「雷神の発動を表わすもの」[19]と解かれているが、この見解は私の明らかにした蛇神（雷神と同体）の古代観念に立つならば正しいと云い得よう。この丹塗矢伝説は三品博士によれば「インド、ゲルマン系神話にも、他民族の神話伝説にも多く見られるところ」[20]だという。わが賀茂伝説においては、乙訓の火雷神が丹塗矢となつて賀茂川を流れ下り、玉依姫に憑依し、又三輪の大物主神が丹塗矢となつて勢夜陀多良比売と神婚したという意味は、恐らくは生成神なる蛇神の勢能が生命の矢となつて之ら女性に憑依し、水の母神・生成の聖母（前記両の女性は何れも水の神女である）たるの霊格を獲得せしめるのだと解釈してよいようである。かかる霊能を享受した神女のみ穀霊たる神子を万全に育養成熟せしめる霊力をもつものと信ぜられていたのである。三品博士は中国古代の高禖祈子の祭儀を左の如く興味深く説かれている。

「矢と天神の崇拝、及び出誕と矢の民俗に就いては、未だ云うべきものを多く残しているが、今はすべてを割愛し、ただ高

禖（田中註、子を授けるという神の名）祭の祭儀に就いて一言して置こう。支那古代の高禖の祭儀は、仲春玄鳥の来る日、天子親ら赴いて高禖を祈り、后妃九嬪之に従い、その時天子の御子を孕んで居る者は、弓鞬を帯び、高禖の前で弓矢を授けられる儀式を行うのである。そしてこの弓矢は、男子を求めるの祥なりと考えられ、またその子が天材を得る所以とも云われて居るが、かかる祭儀実修上の矢こそは、天子の御子を生み奉る女性には、無くてはならない天瑞であつた。而してこの高禖祈子の行事は、単なる天子の嗣を得ると云うだけではなく、古くそれは農作に生成力を及ぼす大切なる祭政的行事であつたが故に、そこに農耕祭儀と矢の関係を考え得るであろう。」[11]

私按によれば、この際天子は生成神（古代農耕国家の王者が蛇神の現し身的顕現であり、生成の神であつたことについては、近刊「神と天皇の新研究」において明らかにしたい）としての資格において、この呪矢を親授するものであり、之を享受せる「きさき」は生成の霊威を獲得して御子を生み、又之を育養するの聖職を完了するの不足なき実力を備うるのである。而して穀物的存在たる王者（古代王者は蛇神なるが故に穀神であり、御歳神であつた）の御子（それは謂わば三品博士の説かるる、穀童として観念せられ勝である）の生々発育は、全国土の穀物の生長、成熟を象徴するものであり、皇妃のもつ御子育養の力能はそのままに農穀を豊饒に齎らす働きであると信ぜられていたのではないかと思う。こうして出誕したヒツギの御子なるもののヒは、単なる日や火ではなく霊（ひ）（産霊（むすび））であり、生成全般の勢能を指すものであつたことは極めて明瞭である。そしてその生成力の具体的内容は云う迄もなく火（日）と水であつたのである。出雲古王家の流れを引く出雲国造の代替りには、只に神火が引継がるる許りでなく、同時に神水をも継承する事実を参考すべきである。

かくの如く、農耕国家の呪巫君長は、こうした生成の呪力を必然に要請され、ために右に述べたような生命の呪矢を神器として宝蔵するのである。「支那上代の天子は彤弓彤矢を所有し、天朝の名器として伝承した」[12]と云われている。ここに云う彤弓は丹塗弓であり、彤矢は丹塗矢と同一物である。三品博士は又晉張華「博物志」から徐偃王の伝を引載され、彼が上国に舟行せんと欲して溝を通過する時、蔡陳の間に朱弓朱矢を得、天瑞を得たるを嬉んで名を弓と為し、自ら徐偃王を名乗つたが、江淮の諸侯みな之に伏従したとあるを解説され、「徐偃王にしても朱蒙にしても、水辺の女神の与える特殊な弓矢なるものが、建国の王者にとつて必要缺くべからざるものであつたことをここに今一度回顧して置きたい」[13]と結ばれている。ここ

に水辺の女神と云わるるのは、云うまでもなく蛇神を考えるほかなく、ここからも蛇神と弓矢との密邇な関わりが思い深められようし、又わが神武天皇が天羽羽矢を表物（しるしのもの）として持たれていたという伝えを想起せしめずに措かない一条でもある。こうした生成の矢は只に農耕を益し、豊饒を助ける呪能をもつばかりでなく、生成を沮む邪気を厭勝するものと信じられ、延いては破邪降魔の利勢さへ附与せらるるに到つた。聖徳太子伝暦には、物部守屋が蘇我馬子らの討伐を受けた際、守屋防戦の状を活写して、「此時大連大榎に登り、誓つて物部府都大明神の矢を放つ」とあり、石上布留の大神の生成霊を宿した呪矢を射込んで怨敵を慴伏退散せしめんとした。

併し朱弓・朱矢のもつ生成力・活力が異常に溢出する時、恐るべき魔力と化する。三品博士は、墨子の中に見える死せる杜伯鬼神に化して周宣王を執殺す話を紹介されているが、この時杜伯の用いた兇器は朱弓であつたのである。

結び

わが古代農耕社会における主神が蛇神であり、又当代著名の呪器たりし剣・鏡・玉・矢等、何れもこの生成の母神たる蛇神の物的表象であつたことは、以上縷述の論考によつて略々明らかになつたことと思う。而してこの蛇神のもつ生成力とは、終局的には、人々の生きのたつきであり、生命の源泉である稲米を成熟せしめる勢能そのものであつたらしい。されば人々の祈りと希望は、この神勢の程よき発動という一点に懸つて息む時もない。げに原始宗教時代の諸事相に心を向ける時、この生成力への関心は殆んど狂熱的とも云い得べく、上には生成の母神天照大神（この神の日神たるは、この神の蛇神なるが故の一面で、他に生成の神たる水の母神というより重要なる面のあること[11]を忘却してはならない）を皇祖に奉戴し、生成の呪器たる三種の神宝（みくさのかむだから）に象徴される呪師的王者（古代天皇）を神人と仰ぎ、これを頂点として一大祈願協同体を形成していたかに思われる。されば古代天皇のもつ霊能の性格は、そこから当然推察が可能となるので、それは単なる神ではなく、生成の神（日と水の神）、具体的には稲穂を成熟せしめる御歳神と想念されたと断じて不可ないであろう。神武天皇が天神の表物として生成の呪矢たる天羽羽矢をもち、みずからは又高皇産霊尊（生成神）となつて、道臣命により祀られたことを想起すべきである。而も生成の呪具たる三種の神器は皇位の象徴として歴世相伝うる宝器であつたのである。こうした生成力への異常な執心は、何に起因するかが次に問わるべき問題であろうが、それは畢竟わが国における水旱の惨害の苛烈さ、激甚

さにあつたとしなければなるまい。この国を豊葦原瑞穂国とは誰が名付けし。かかる慶称嘉言のかげに、只管言霊にかけてこうした理想郷の実現を、儚なく夢見つづけた古人の悲懐をわれわれは洞見しなければならないのである。神や天皇の新研究は、こうした観点を出発点として展開さるべきではなかろうか。

① 神話と文化境域
② 拙稿「神の原始像」「再び神の原始像について」—徳島大学社会科学紀要第一巻、第二巻
③ 古事記上巻
④ 諏訪縁起絵詞
⑤ 古事記上巻
⑥ 山神であるが海神の転身と思料される
⑦ 朝鮮古地名の研究—朝鮮学報第三輯
⑧ 拙稿「聖語 pur の研究」—朝鮮学報第六輯
⑨ 建国神話論考
⑩ 河童駒引考
⑪ 朝鮮古地名の研究
⑫ 鎮魂歌とその周辺—国学院雑誌大学院開設記念号
⑬ マライシヤの稲米儀礼
⑭ 建国神話論考
⑮ 日本神話研究
⑯ 建国神話論考
⑰ 江田発掘大刀及び隅田八幡神社画像鏡の製作年代について—考古学雑誌第二十四巻第一号
⑱ 建国神話論考
⑲ 古事記景行段
⑳ 建国神話論考
㉑ 櫪本杜人氏「石上神宮の七支刀とその銘文」—朝鮮学報第三輯
㉒ 古語拾遺新註
㉓ 日本書紀垂仁紀
㉔ 折口博士「古代研究」
㉕ 日本に於ける原始信仰の研究
㉖ 建国神話論考
㉗ 日本に於ける原始信仰の研究
㉘ 文徳実録斉衡三年条
㉙ 古代研究
㉚ 鎮魂歌とその周辺
㉛ 日本の古代と支那の文物—世界文化昭和二十一年三月号
㉜ 鎮魂歌とその周辺
㉝ 梅原博士「日本考古学論考」
㉞ 駒井博士「日本の古代と支那の文物」—世界文化、昭和二十一年三月号
㉟ 江田発掘大刀及び隅田八幡神社画像鏡の製作年代について、上代鍛冶族覚書—雑誌「古代研究」第二、三輯合併号

㊲ 朝鮮学報第六輯
㊳ 神話学論考
㊴ 神話学論考
㊵ 建国神話論考
㊶ 建国神話論考
㊷ 建国神話論考
㊸ 建国神話論考
㊹ 拙稿「天照大神新考」―徳島大学社会科学紀要第三巻
㊺ 日本古代宗教
㊻ 拙稿「天照大神新考」
㊼ 神度鋤考―神道史研究第一巻第三号
㊽ 先代旧事本紀
㊾ 拙稿「聖語 pur の研究」
㊿ 神功五十二年紀

会員移動

新入会

愛知学芸大学名古屋分校図書館　名古屋市東区大幸町一ノ一
宇都宮清吉
加地文彦
金子光介
亀井正道
佐藤武敏
滝川政次郎
福沢宗吉
藤井甚太郎
別技篤彦
増永昭一郎
三田村泰助
諸戸立雄
山根幸夫

九州工業大学附属図書館　福岡県戸畑市中原
西川正二
藤井大恵
山本有三
脇田修

住所変更

浅野清

㊲ 朝鮮学報第六輯
㊳ 神話学論考
㊴ 神話学論考
㊵ 建国神話論考
㊶ 建国神話論考
㊷ 建国神話論考
㊸ 建国神話論考
㊹ 拙稿「天照大神新考」―徳島大学社会科学紀要第三巻
㊺ 日本古代宗教
㊻ 拙稿「天照大神新考」
㊼ 神度鈴考―神道史研究第一巻第三号
㊽ 先代旧事本紀
㊾ 拙稿「聖語 pur の研究」
㊿ 神功五十二年紀

会員移動

新入会

愛知学芸大学名古屋分校図書館　名古屋市東区大幸町一ノ一
宇都宮清吉　京都市左京区鹿ヶ谷寺ノ前町八九
加地文彦　京都市東山区今熊野北日吉町　京都女子高校内
九州工業大学附属図書館　福岡県戸畑市中原
西川正二　東京都文京区本郷森川町七七　村山方
藤井大恵　京都市上京区小山上総町　大谷大学国史研究室内
山本有三　神奈川県湯河原町宮上三三九ノ一
脇田修　京都市左京区北白川山田町三三　岩田方

住所変更

浅野清　奈良県大和郡山市九条町
金子光介　京都市右京区嵯峨小倉山町
亀井正道　東京都世田谷区羽根木町一七四五　羽根木荘内
佐藤武敏　芦屋市西芦屋町三〇　赤堀方
滝川政次郎　神奈川県真鶴町一二四五
福沢宗吉　熊本市池田町西原一〇〇七
藤井甚太郎　東京都北多摩郡国立町西区三一九ノ四
別技篤彦　東京都中野区大和町三〇五
増永昭一郎　鹿児島県姶良郡加治木町加治木高校内
三田村泰助　京都市右京区太秦安井東車道町一四
諸戸立雄　秋田市保戸野原ノ町　秋田大学学芸学部内
山根幸夫　東京都文京区森川町一〇七　和田方